

イイことあるぞ!メスド♡

～ドーナツ食べ放題を楽しむはずが
ちんぽ狂いのメス奴隷になった金欠大学生～

「腹減った……死ぬ……」

俺、^{かんざきみつ}甘崎蜜は情けなく鳴り響く腹の音にゲンナリした。

念願の上京を果たしたまでは良かったが、待っていたのは金欠大学生という残酷な現実だ。もっぱら自炊スキルだけが爆上がりして、最近はやし料理のレパートリーが100を超えた。まじで泣けてくる。

「……ん?なんだ、このいい匂い」

ふわりと、鼻腔をくすぐる甘くて香ばしい香り。揚げたての生地と、とろけるシュガーの暴力的な誘惑。

「ドーナツ……っ!」

フラフラと吸い寄せられた先に現れたのは、ポップな看板

を掲げたかわいいお店『ドーナツショップ・メスド』

「なにになに……オープン記念!特別個室で楽しむ極上ドーナツ
食べ放題・ワンコイン 500 円!？」

二度見した。見間違いじゃない。なんてったって俺は大の
甘党だ。こんなの、俺のために用意されたご褒美みたいな
もんじゃないか。

「行くしかない……! 貧乏学生の底なしの胃袋、舐めんなよ!」

※

「いらっしゃいませ! 1 名様ですね」

「は、はい……看板みたんですけど」

入店するなり、眩しいほどの笑顔を浮かべた金髪イケメン
マッチョな店員に迎えられた。

着ているのは『MESUDO!』とロゴが入った、ピチピチの
白いTシャツ。そして下半身は……デニムのショートパンツ?

いや、もうそれはホットパンツと呼ぶべき短さで、たくましい太ももがこれでもかと露出している。

(……お店もポップな雰囲気だし、アメリカンスタイルなのかな?)

少し面食らっていると、店員は俺の顔をじろじろと眺め、唇をなめた。

「わお! 食べ放題ですね! こんなかわいい子がきてくれて嬉しいな。早速お部屋へご案内します!」

「はあ……」

こんな平凡を絵に描いたような俺にかわいいって正気か……? ま、そんなのはいい。早くドーナツが食べたい!

あけすけな褒め言葉に戸惑いながらも、俺は期待に胸を膨らませて彼の後を追った。

この時、複数の視線が俺を品定めするように見ていた事に、空腹が限界突破していた俺は微塵も気づいていなかった。

「お待たせしましたあ!」

「待ってました!」

目の前に並べられたのは、山盛りのドーナツ。揚げたての熱気とともに、濃密な甘い香りが立ち上る。ちなみにバイキング形式ではなく個室で注文するスタイルみたいだ。

「いただきま……」

「お客様、少々お待ちください!」

早速ドーナツにかぶりつこうとした瞬間、元気な声に制止された。眩しい笑顔を向けてきたのは、先ほど対応してくれた金髪イケメンマッチョ。胸元のプレートには『店長・千代田』と書かれている。

「当店には、最高にドーナツを楽しんでいただくための『こだわり』があるんです!」

「こだわり?……っ、うお!？」

次の瞬間、視界がぐわんと跳ね上がった。気付けば、俺は千代田さんに軽々と抱き上げられ、彼の分厚い太ものの

上に横向きに寄せられていた。

「は!? え!? なになに、何事!?!」

「当店自慢の『イーティング・サービス』です! お客様は座っているだけ OK !我々スタッフが食べさせるスタイルです!」

「い、いらない! いらないって! 俺、男だから! やるなら女性客にやってよ……」

「あはは、何を仰るんですか! 女性も男性も、当店にとって大切なお客様です!遠慮なく召し上がってください!」

「ええ……」

千代田さんは悪びれる様子もなく、カラッとした笑顔で俺の腰をがっしりとホールドした。とんでもない事になってしまったが、結局、俺は断りきれないまま、成人男性に抱っこされながら食事をするという、人生最大の謎シチュエーションを受け入れる羽目になった。

「ほら、まずは一番人気のハニーディップから。あーん、してください!」

千代田は手袋をはめた指先で、ふわふわのドーナツを一

口サイズにちぎった。たっぷりとグレーズが染み込んだ生地が、千代田の指圧でじゅわりと蜜を滲ませる。

「あ……あーん」

国宝級イケメンのドアップにドギマギしながらも、俺は促されるまま口を開けた。

「!? んんっ、おいひい……っ」

何これめちゃくちゃうまい! 放り込まれたドーナツは驚くほど甘くて、噛むたびに多幸福感が脳を突き抜ける。

「ふふ、いい食べっぷりですね! 当店自慢のドーナツ、気に入っていただけて嬉しいです!」

千代田さんは本当に満足そうに、俺の腰を支える腕にぐっと力を込めた。

「……っ、次は、チョコのやつ食べたい!」

あまりの美味しさに、羞恥心より食欲が勝ってきた。俺が皿を指差すと、千代田さんは「かしこまりましたあ!」と威勢よく応えてくれる。

こうなったら、恥なんて捨ててとことん食べてやる! そう意気込んでいた、はずなんだけど……。

(あれ……なんか……身体が、変だ……)

数種類食べたあたりで、じんわりと身体が熱くなってきた。胃の奥からじわじわと熱が広がって、心臓の音が耳元までうるさく響く。

「はあ……ん、っ……♡」

「お客様? 食べ放題は始まったばかりですよ! どんどんいきましようね! はい、あーん!」

「あー、っ……んっ」

美味しい。間違いなく美味しいんだけど、糖分が回りすぎたみたいに頭がぼうっとして、視界がふわふわと滲み始めた。千代田さんの抱擁が、さっきよりずっと熱く感じて、思わず遅

しい胸板に寄りかかってしまった。

「いい感じに『効いて』きたかな？……お客様、おいしさをダイレクトに味わってもらうために、今度は特別サービス！口移しで提供させていただきますねー！」

「んえ……？くち……っ？」

千代田さんの陽気な声が、遠くに聞こえる。意味を理解するより早く、千代田さんは自分の口にクリームたっぷりのドーナツを挟み、そのまま俺の顎を強い力でクイツと持ち上げた。

（え、ちょっと、待っ……!）

抵抗する力も入らないまま、視界を千代田さんの整った顔が塞いでいく。「あーん」と無理やりこじ開けられた俺の口の中に、甘いドーナツが強引に滑り込んできた。

（ん、んぐ……っ!?)

次の瞬間、口内に広がったのは体温でとろけたクリームの

甘さと、熱くて分厚い、千代田さんの舌だった。ドーナツはあっという間に口内で消えて、代わりに彼と俺の舌がねっとりと絡み合うディープキスが始まる。え、なんで?どうなるの!?

「んむ……れろ、っ、んんう!」

(あ……れ……?)

パニックになる俺の思考を置き去りに、今度はTシャツの裾から大きな手が迷いなく忍び込んできた。熱を帯びた厚い手のひらが、俺の脇腹をさりとなぞり、そのまま肋骨のラインを執拗に這い上がってくる。

「ふ、ん`っ……んむうっ!？」

千代田さんは俺の口を塞いだまま、まるで宝探しでも楽しむような手つきで、俺の胸元まで手を滑らせてきた。そして突然、男らしい指先が、俺の乳首をピンツ♡とはじいた。

くりくりっ♡……ぴんっ♡♡

「あ……っ!?♡なんで、ちくび……さわ……っ、あ♡」

「んー?より美味しくドーナツを召し上がっていただくためですよ?」

唇が離れた瞬間、千代田さんは悪びれる様子もなくニコリと笑った。

いや、そんなわけないだろ!? どんな理屈だよ!

必死でツツコミを入れたいの、熱を持った身体は千代田さんの太ももの上で力なくピクピクと跳ねるだけだ。

「そうだ! お客様。喉が乾いてませんか? ドーナツと相性ぴったりの、搾りたてのミルクを飲みましょう!」

「みる、く……っ?」

熱に浮かされた俺が問い返す間もなく、千代田さんは個室のドアに向かって弾んだ声を張り上げた。

「牛田^{うしだ}さーん! 一期^{いちご}さーん! ミルク、お願いします!」

「はーい!」

その瞬間バタンッ! と勢いよくドアが開いた。そこに立っていたのは、はち切れんばかりの筋肉を『MESUDO!』の制服に押し込んだ、ふたりの男たち。

「お待たせしましたぁ! ちょうど今、最高に新鮮なのが出せますよ」

「わぁ、本当にかわいいお客様……♡」

黒髪でエキゾチックな色気を放つ牛田さんと、ピンクに染めた髪が鮮やかな、アイドルみたいに甘いマスクの一期さん。系統は全然違うけど、ふたりとも千代田さんに負けず劣らずの超絶イケメンだ。

「……っ、ちょ、え……っ?」

俺を取り囲む、イケメン三人衆。ただでさえ狭い個室に、充満するドーナツの甘い香りと、ムワッとするような雄の熱気が充満する。

「さぁお客様、当店自慢のミルク……一滴残さず、しっかり味わってくださいね?」

カチャ、カチャ……ボロンっっっ!!

「ヒィ……っ!？」

目の前に突き出されたのは、おおよそミルクとは思えないもの……ギュインと天を突くように反り返り、血管の浮きでたペニスだった。

「な、何してるんですか……っ! それ、ミルクじゃない……っ」
「何をおっしゃってるんですか。新鮮な『おちんぼミルク』ですよ? 当店のミルクは鮮度が命ですから、お客様ご自身で搾ってもらうルールなんです。さあ、遠慮しないで!」

そう言うと、千代田さんは俺の震える手をがっしり掴み、牛田さんのちんこへと無理やり導いた。

「さあ、どんどん動かしてみてください! しゅこしゅこ〜♡ はい、しゅこしゅこ〜♡」

俺が戦慄しているのもお構いなしに、千代田さんは俺の手の上から自分の手を重ね、強制的に上下に動かし始めた。

「ん、んんう……っ♡」

見知らぬ男のちんこをシコっている、人生最大の謎状況
パート2。でも、身体が自分のものじゃないみたいに言うこ
とを聞かない。戸惑いながらも、千代田さんの間抜けなリズム
に合わせて、ちんこを扱き上げるしかなかった。

(うう……はやく、終わって……っ)

そう思った瞬間、さらなる衝撃が下半身を襲った。

「ひあっ♡!? え、あ、っ!?」

「僕もお客様のミルク、しゅこしゅこする〜♡」

なんと一期さんがいつの間にか俺のズボンとパンツを膝ま
で引きずり下ろしていた。

「わあ……お客様のおちんちん、一生懸命勃っててかわいい
♡♡」

一期さんは俺のちんこを、まるで極上スイーツでも見るよ

うな目で見つめた後、しなやかな指先で根元からギュッと握り込み、ゆるゆると上下にしごき出した。

ちゅこっ♡ ちゅちゅこっ♡ ぬちゅちゅっ♡

「ひあっ♡んんゝ……っ♡♡」

手コキの甘やかな刺激に、俺の背中が弓なりに跳ねた。頭がとろけるような気持ちよさに身を委ねそうになったその時……。

「あゝ ～!お客様、そろそろミルク出ますっ!」

「!?!?!?」

じゅぷおお……つつっ!!!♡

「んごっ……!?!?♡♡」

突如、牛田さんの熱いペニスが俺の口内に無理やり突き立てられた。喉の奥を直接ノックするような圧倒的サイズにパニック状態なのに、牛田さんは俺を気遣う様子はなく、腰

を楽しげに前後に揺らす。

「すみませんねっ……!鮮度命なんで、お口で直接味わって欲しいんですよ!!歯を立ててはだめですよ!？」

じゅっぽ♡じゅっぽ♡じゅっぽ♡じゅっぽ♡じゅっぽ♡

「んん~~~~っ!!!」

抗議の声を上げたくてもパンパンに塞がれた口からは、くぐもった悲鳴しか出ない。千代田さんの逞しい腕に抱えられたまま、必死に太ももをペチペチ叩いてみたけれど、岩のような筋肉の前ではあまりにも無力すぎて……。

「わあ!お客様の乳首、いちごみたいにぷっくりしてきましたね!美味しそ〜♡」

ぴんぴんっ♡♡♡……じゅるるるっ♡♡♡

「んんっ!? あ、んんう……っ!!!」

千代田さんに乳首を弄られ、そのまま熱い舌で直接しゃぶられる。じゅるじゅる♡と吸い上げられる音まで聞こえてきて、羞恥心に身体が悶える。

「お客様～♡ おちんちん、ピクピクってしてきましたね♡ ミルク、出ちゃいます？ 出しちゃいます？♡♡」

ちゅこっ♡ ぬちゅちゅっ♡

一期さんのあざとい指先が、ちんぽをしごくスピードを上げた。

「お客様の口マン、最高っすね！たくさん濃厚ミルク出そうですよ!!……くっ、射精るぞ、射精るっ!!!」

ガツっ!!♡♡ガツっ!!♡♡じゅっぽ♡♡♡じゅっぽ♡♡♡

牛田さんの腰使いが激しくなり、喉の奥までズブズブと蹂躪される。

千代田さん、一期さん、そして牛田さん。それぞれ攻めら

れて、俺の頭は甘い甘いホイップクリームみたいに真っ白に塗りつぶされて……。

「っ、ん 〜〜〜〜〜!!!!!!♡♡♡♡♡♡♡」

どぶっ、どびゅるるるるるるるるるるるるるるる〜
〜っ!!!!!!♡♡♡♡♡♡♡♡

ぴゅく、ぴゅるるるっ……♡♡

牛田さんの熱い『ミルク』が口内に勢いよく、かつ大量に発射された。それと同時に、俺も一期さんの手のひらの中で、情けなく精液をぴゅくぴゅくと吐き出してしまった。

「ん、んぐ、う……っ」

あまりの勢いに、『ミルク』を飲み込む以外の選択肢がない。喉を通るドロリとした精液の熱さに翻弄され、酸欠になりそうになりながらも、俺は必死に飲み干していく。

「……ゲホッ、ゲホ!! ……はあ、はあっ」

ようやく解放された俺の口端からは、飲み込みきれなかった精液がだらしく糸を引いて滴っていた。

「は〜い!ミルクタイム終了〜!!♡それではお次は『ドーナツなりきり体験』 いってみよう〜!!」

「……は……んえ？」

千代田さんの高らかな宣言に、一期さんと牛田さんが「待てました!」とばかりに盛り上がる。俺ひとりだけが、その異常なテンションについていけず間抜けな声を上げた……のだが。

「はい、ぱっかーん!!♡♡」

「え……っ!?ひ、あぁっ!」

次の瞬間、一期さんに両足をぐいっと高く抱え上げられ、視界がぐにやりと反転した。

気づけば、恥ずかしすぎる『ちんぐり返し』の格好にさせられていた。